

薬学研究科

伊藤美千穂

准教授



医学部附属病院よりさらに西側、薬学部構内にはさまざまな薬用植物が植えられた薬用植物園があります。今回はそんな薬用植物園を利用した研究を進める伊藤准教授にお話を伺いました。

Profile

1992年京都大学薬学部卒。院へ進学後、'96年に博士課程を中退して薬学部の助手となり、'97年以降は本学薬学研究科で助手などを勤める。'02年から翌年までワシントン州立大学に留学。現在は多くの学会にも所属し、日本の生薬学研究における第一人者である。

～学生時代について～

なぜ京大の薬学部に
進学したのですか？

やはり「自由」というのが大きな要因でした。当時はオープンキャンパスやWebページもなくて、大学についての情報が乏しい中で、たまたま大学の先生から話を聞いた時に一番しっくりきたのが京大の先生でした。

学部については、私は最初は農学部志望だったのですが、もう30年も前なので周囲では農学部は農業をする学部というイメージが強かったんです。私の親戚には個人商店を営んでいる人が多かったので、母親にお百姓さんはだめって言われてしまいました。それで医学部を勧められたのですが、医者はずっと……と迷っていたところ今度は母親が薬学部って言い始めて、どのような内容の勉強をしているのかもあまり知らないままとりあえず薬学部を志望しました。

どのような大学生活を
送っていましたか？

私が大学に進学した当時、父親が失職してしまっていて、家にお金がありませんでした。そのため、下宿するお金もなくて西宮の実家からずっと電車で通っていました。

大学の授業以外では、家庭教師のアルバイトをずっとしていました。というのも、当時は家庭教師の派遣サービスというのもなく、家庭教師の申し込みはいわゆる口コミで広がっていました。西宮に住んでいる理系で女性の京大生というのがかなり珍しかったので、申し込みはたくさんありました。私は小学生専門だったのですが、1日1件回っていてもほぼ毎日あるほどでした。

入りたいサークルもあったのですが、練習日程などを聞くどうしても都合が合わず、結局一つも入りませんでした。

留学してどのようなことを
学びましたか？

私はアメリカに留学したのですが、それまでに研究で試料採集のために行っていた途上国とは少し違って、白人の文化の中に放り込まれたときの異様な雰囲気を感じることがありました。その中で研究などを行っているうちに、「やっぱり日本人っていいな」と思いました。アメリカ人は他の領域に攻めていって勝つという文化や傾向があるのに対して、日本人はそういう場合に和を保つ方向に動こうとする傾向があるんです。例えば、日本では研究室で共用の実験器具は使った後に洗って返すことが多いと思うんです。しかしアメリカでは洗って返すことはしません。最近日本でもアメリカのようになりつつある瞬間を見ますが、日本人のいいところはそのまま失わないでほしいと思います。

～薬学について～

薬学に興味を持った
きっかけは何ですか？

2回生の時に、受けていた授業はほとんど一般教養だったのですが、その中に1つだけ当時は専門科目だった「薬用植物学」がありました。それを受けるようになってから、「結局人の病気を治すのは最終的にはその人の免疫力や体力といった力だが、それを全面的にサポートするのは薬であって、医者とはどちらかというアドバイザーである」というのが見えてきて、薬も面白いかなと思いはじめました。

その後、4回生の時には、生薬の研究室で指導してくれた教授と議論の相性が合わなかったのでフラストレーションがたまっていました。このままでは満足できないと思いついたのですが、大学院ではさまざまな先生に話を聞くことができたこともあり議論がうまくいかなかった理由もわかってきて、研究がだんだん面白くなってきました。

現在どのような研究を
されていますか？

分野としては薬用植物と生薬で、薬学部の中では唯一植物を対象とした研究を行っています。特にシソやケイヒ、それと沈香という香道で使われる香木を扱っていて、そのような匂いのある植物に関して、匂いにも薬理活性があるのではないかとということを出発点としています。そのほかにも匂いを持つ物質の生合成や化合物の形の特定など植物に関するさまざまなことを研究しています。



▲独特の香りを持つシソの葉

今後の目標は何ですか？

最近は企業との共同開発を通じて私たちの研究成果から製品が誕生するようになりました。例えば、私たちの研究室で開発した「シモアダチ」というシソが目の下のクマをとるアイクリームになってネットで販売されています。このように、ちょうど今までずっと積み上げてきたことが形になる時期にきています。今後もただ勉強するのではなく社会に役立つ研究をしていきたいと思っています。



▲「ケイヒ」は生薬としての名前で、香料の「シナモン」と同じ植物である

～教員・研究者として～

講義を行う際に
気をつけていることは何ですか？

私は前期の全学共通科目の「薬用植物学」を担当しています。先に述べた通り、これは私自身が大学生だった時にも受けていたものなので、自分の学生時代の経験から反すうして、どうすれば頭の中に入ってきてやすいか、興味を持ってもらいやすいかを考えて授業をしています。やはり学問というのは一歩引いてショーウィンドウの外から見ているのでは好きか嫌いかわからないので、興味を持って一歩踏み出してもらえよう環境を作るのが講義を行う側の仕事だと思っています。だから、「薬用植物学」の授業では、薬学を専門とする人でなくとも、薬学にはこんな世界が広がっていますよ、ってわかてもらえよう、薬学の入り口になるような講義にしたいと思って授業を組んでいます。

女性ならではの苦労などは
ありましたか？

私が学生だった頃と今とでは、大学の中で、サイエンスの中での女性の立場は随分と変わりました。当時は「女は博士課程に要らない」って普通に教授が言っていたような時代で、私を助手に採用してくれた先生もとても気を使ったようです。女性の助手を雇うだけでも根も葉もないような噂を立てられてしまうので、ともかく男になれと言われてました。スカートははくな、白シャツ以外禁止、髪は短く、化粧はするな、などと言われましたが、そうでもしないと後ろ指を指されてしまうような、そんな時代でした。

現在ではだいぶ環境が変わって法律でも守られるようになってきていますし、男性側の意識も変わってきているので、今の女子学生にはいろんなことを謳歌してほしいと思います。

京大生にメッセージをお願いします。

ぜひ、京大生であることを誇りに思えるような大学生活を送ってほしいと思います。京大生というのは、社会に出たときに社会のリーダーシップを取ることが期待される人材なんです。大学生であるうちは、周りも京大生なのでそのことをあまり意識しないと思います。しかし、一歩社会に出てみるとさまざまな場面でリーダーになることを要求されることがあります。ですから、そのことを在学中に、できれば自分が理想とする先生の姿から学んでほしいと思います。「京大生だから自分は偉い」と思うのではなく、社会をまともな方向に導いていくリーダーになることが要求されるということ、自分の憧れる先生やいいなと思う先生の姿から学んでいってほしいと思っています。